

2021年1月10日 主日礼拝説教要旨:フィリピ書シリーズ ①

フィリピの信徒への手紙 16:6～10 「マケドニアからの招き」

高井 卿 介

今年は使徒パウロの四通の獄中書簡の中でも、特に多くのクリスチャンに親しまれている「フィリピの信徒への手紙」を取り上げて語ることにする

I. フィリピ書の著者パウロの生い立ち

著者パウロはディアスポラ(外国に離散したユダヤ人)として、ローマ帝国キリキヤ州のタルソの町でローマ市民権を持つ家に生まれ、サウロと呼ばれた。学齢期に達するとエルサレムのラビ(律法学者)ガマリエルの許で学び律法の教師となった(使徒22:3)。

当時、十字架で死んで甦ったイエスをメシアと喧伝する者たち(クリスチャン)が現われた。パウロは彼らを容認出来ず彼らを迫害する急先鋒者となった。

そこでクリスチャン達は迫害から逃れるため、シリアのダマスコに集まっていた。パウロはそれを見逃せず、彼らの後を追ってダマスコへと急いだ。

パウロがダマスコに近づいた時、天からの光に照らされ復活のキリストに出会い、「サウル、サウル、何故わたしを迫害するのか」と声をかけられ(使徒9:1～5)、イエスを信じた。これがパウロの回心であった。彼はミイラ取りがミイラになったのである。

II. フィリピ宣教の経緯(いきさつ)

迫害者「サウロ」は宣教者となり、信仰の先輩バルナバと共に第1回伝道旅行に出発し、キプロス島での宣教の時から、名前をギリシャ語風の「パウロ」に変えた(使徒13:9)。

続いてパウロは第2回伝道旅行に出発した(使徒15:36)。この時は前回宣教した地を逆コースにデルベ、リストラ、イコニオン、ピシディアのアンティオキアと進み、パウロはここからアジア州の中心都市エフェソの町の宣教を目指そうとした。

しかし、聖霊から禁じられてやって来たのが、エーゲ海に面する港町トロアスで、ここでパウロは「マケドニア州に渡って来て、私たちを助けてください」(使徒16:9)という幻を見た。それは福音がアジアからヨーロッパに伝えられることを意味する。

なお、ここで使徒言行録の主語が「彼らは」から「わたしたちは」に変わっている(16:6→16:10)。これはここから著者ルカがパウロの伝道旅行に参加した事を意味する。こうして始まったフィリピでの宣教はリディアとその家族、牢獄の看守とその家族が最初の信徒となり教会が生まれた。

III. こうしてフィリピの信徒への手紙が書かれた

その後、パウロは事件に巻き込まれ、彼はローマ市民権を持つ特権を生かして、皇帝による裁判を受ける未決囚として、ローマの牢にいた。そこにフィリピ教会の信徒エパフロデトが慰問に訪れ、重病になったが回復し、フィリピに戻るようになった。

そこで、パウロはフィリピ教会が彼のために、度々愛の贈り物をしてくれた(フィリピ6:10～14)ことへの感謝のお礼を書き、それをエパフロデトに持たせて帰すことにした。これが「フィリピの信徒への手紙」である。